

平成24年度公益財団法人大阪市博物館協会外部評価【外部評価シート1・2】

館・所名	市立美術館		委員名	
		委員コメント総括		
【シート1】 各館・所の運営状況(総括)		<p>・指定文化財を含む質の高い充実したコレクションと優れた学芸スタッフを擁し、大都市大阪の文化創造拠点の一角として存在感を発揮している。ただ、利用者が多様化する中で、現場の作業は増え、現有のスタッフ数では対応できなくなっている面もある。今後、要員の拡充が望まれると同時に、大都市大阪の美術館としての役割、進むべき方向をシンプルな言葉で再定義していく必要がある。</p>		
【シート2】 各館・所の特徴	「館の強み」の認識	<p>・関西を、というより日本を代表する総合美術館であり、秀れた学芸スタッフと質の高いコレクションは定評のあるところである。その基盤になっている公立美術館としての豊かな歴史もまた見逃せない。そうした他館には見られない独自の資産をきちんと評価して、その魅力を引き出し、伝えていくための一層の工夫が望まれる。</p>		
	「館の弱み」の認識	<p>・厳しい財政状況の中で建物の老朽化への対応は美術館というより市政にとっての重要な課題。現場の作業に様々な面で支障をきたしていることが推測される。したがって事態改善に向けた早急な手立てが必要だが、その際、建築が建築自体の歴史的な価値と、それが町の人々の記憶や周辺環境に果たしてきた役割を落ち着いて正当に評価する視点がほしい。また学芸員、ことに正規職員の学芸員の減少は美術館の運営に大きな支障をきたす恐れがある。一方、大都市大阪の公立美術館としての自らの使命について、一度再確認しておく必要があるかもしれない。常設展入場者の数が少ないことは、65歳以上の人が無料であった年度の数値であることを考えれば、原因究明と改善策の立案がなされるべきである。</p>		
	「環境の変化」の認識	<p>・阿倍野地区、JR天王寺駅が再開発により大変化していく中、美術館へのアプローチについても改善されることを要望する。天王寺公園、慶沢園を含んだアプローチは美術館周辺の価値を再評価するものとなるであろう。地元の既存商店街や住民との信頼関係をベースに、高齢化社会の本格的到来をむしろ好機として捉え、今後新たにできる阿倍野周辺の様々な施設と連携して、相乗効果を高めることが期待される。</p>		
	指定管理期間の成果	<p>・施設維持や展示環境の改善のために持続的な投資が行われていることは評価できる。また、「住吉さん～住吉大社1800年の歴史と美術～展」(22年度)がその好例だが、地元で眠る文化遺産の価値を掘り起こすという視点を大事にしてほしい。</p>		
	今後の課題	<p>・市政レベルの話になるが、課題として大きいのはやはり建物の老朽化にどう対処するか、という問題である。とくに建築については、地域のシンボルであり、戦前の大阪の財界人、市民の高い志を示すものとして、きちんと評価することが必要である。また大阪市立美術館だけの問題ではないが、学芸員の増員を始め組織体制の整備も喫緊の課題である。この課題に取り組むに当たっては、多忙を極めている学芸員の勤務実態について、美術館と協会事務局(総務部)が実態を十分把握することが大前提と考える。いずれにせよ、作品の購入や修復も含めて、多くの課題に対し、適切な優先順位をつけてタイミングを失することがないように予算措置をするべきである。また、美術館として科学研究費補助金申請団体の指定条件をクリアすることも望まれる。</p>		